「不妊」の社会的意味

——マス・メディア言説を通して——

門野　里栄子

The Social Meaning of "Infertility": Through the Discourse of Mass Media

Rieko Kadono

Abstract: The purpose of this paper is to bring to light the social meaning of "infertility" through discourse of mass media. It will show under what social conditions, with what meanings and performing what functions the social problem of "infertility" arises. There are two kinds of discourse about "infertility" which have appeared in articles of the ASAHI SHIMBUN newspaper during the fifty years since World WarⅡ. First, "infertility" has been described mainly as a "medical problem". Secondly, it has begun to be described as a "problem of the parties concerned" from the 1990s. In step with the development of reproductive technology, the problems derived from it have expanded beyond the framework of "treatment for infertility couples", while reconstructing the meaning of child and family demanded in society. The"problem of the parties concerned" appears in the arena where the two social considerations intersect.

Key Words: infertility, reproductive medicine, problem of the parties concerned

要旨：本稿の目的は，新聞にあらわれた「不妊」の言説を通してその社会的意味を明らかにすることである。「不妊」という問題がどのような社会的条件の中から現れ，どのような意味が付与され，また，どのような機能を果たしているのかを提示しようと思う。「朝日新聞」に掲載された戦後50年間の記事に見られた「不妊」の言説の特徴は，大きく2点ある。第一に，「不妊」は紙面に登場して以来，主として「医療的な問題」として語られてきたこと，第二に，1990年代以降，「当事者の問題」として語られ始めていること，である。生殖技術の発展に伴ってそこから派生する問題が「不妊夫婦の治療」の枠組みを越えて拡大し社会問題化したこと，一方，社会において子ども観や家族観の再構築が要請されるようになったこと。この両者が交叉する場において「当事者の問題」が現れている。

キーワード：不妊，生殖医療，当事者の問題

1. はじめに

「不妊」の問題が生殖技術の文脈ではなく，あるいは「不妊症」の症例ではなく，子どもが欲しくてもできない人たちの「生めない問題」[1]として公的な議論の場にのせられるようになったのは，日本においては1991年にレナーテ・クライン編『不妊——いま何が行われているのか』(1989) の翻訳書が出版されたのが皮切りだと言えるのではないだろうか。この本は，世界各国の不妊治療を受けた女性たち自身の語りを通して，フェミニズムの立場から生殖技術がいかに女性の健康に弊害をもたらしているかを批判すると同時に，わが子が産めない女性に押される烙印がどれほど不妊の苦しみを大きくしているかを明らかにした。また，日本でも大日向 (1992) が母性研究の中から，子どものいない女性たちへの聞き取り調査を通して，「女性は子どもを産むもの」という社会通念がいかに

不妊女性に苦悩をもたらしているかを照らし出した。他にも，生殖技術がもたらす問題を焦点にしながら「生めない」問題に触れている文献において，不妊の苦悩の背後に「産む性」としての女性への社会的圧力があることが指摘されてきた（お茶の水女子大学生命倫理研究会，1992；宮，1992；松尾，1995）。

しかしながら，「不妊」という問題がどのような社会的条件の中から現れ，どのような意味を付与され，またどのような機能を果たしているのか，に関する研究は今だ十分に積み上げられているとはいえない。社会学的な視点からの研究として，「産めない」ことに対する概念や人工生殖が普及する心性が形成される過程および今日の状況を論じた倉重の研究（1992）や，戦前の家としての近代家族と戦後のより欧米的な近代家族という二つの家族制度が交錯する現代家族のなかで，不妊家族とそのなかの女性たちが占める位置付けを考察した田間の研究（1995）が挙げられる。さらに言説分析を用いた研究として，1990年から1993年までの3年間に35名の医師に対して行ったインタヴュー・データに基づいて「不妊治療にたずさわった医師の語り」を分析した柘植の研究（1999），1985年から1995年までの雑誌記事を基にマス・メディア空間に流通する「不妊問題」言説を分析した諸田の研究（2000）がある。これらの研究の多くが，「不妊」の社会問題化以降を研究対象としている。山本（1997）が「更年期の構築」の研究において用いたような，1949年から1995年までという長期間にわたる医学論文を通しての医学的言説の分析は，不妊に関して日本ではまだなされていない。

本稿の目的は，新聞に現れた「不妊」の言説を通して，「不妊」の社会的意味を明らかにすることである。ある問題の社会への提示と定着において重要性と一般性を持つ新聞というマス・メディアを採用し，戦後50年間という比較的長期間の流れを追うことによって，社会における「不妊」の意味の変遷をより広く照らし出すことができると考える[2]。そこから，「不妊」が社会においてどのような問題として位置付けられてきたのか，さらにそのことが当事者の問題とどのように関わっているのかについても考察を加えたい。

2. 分析の方法

本稿では，マス・メディアの一つとして新聞記事を取り上げる。複数ある全国紙のうち「朝日新聞」を対象として採用したのは，おもに以下の理由による。比較的長期間の言説を考察するという目的において，「朝日新聞」の場合は戦後50年間の記事見出しがCD–ROM化されており，第一次検索が他紙に比べて容易に行なえる[3]。また，本紙が広く全国的に購読されていることも，選定の理由の一つである。ただし，「朝日新聞」が新聞メディアを代表しているということではないので他紙との比較が必要と思われるが，それは本稿で行なえる分析範囲を越えている。ここでの知見は，「朝日新聞」という特定マス・メディアから得られたものであることを断っておきたい。

主として依拠したデータは，1945年から1995年の記事が収録されている「戦後50年朝日新聞見出しデータベースCD–ASAX 50 yrs」（以下「CD–ASAX」と表記）である。これは「朝日新聞縮刷版（東京版）」の見出しをCD–ROM化したものである。「CD–ASAX」によって検索される内容は，「記事見出し」，「日付」，「朝刊／夕刊」，「掲載面ページ」，「縮刷版ページ」，「掲載段」である。見出しの分類については，編集担当者が各々の記事内容にあたり独自のキーワードをつけており，検索語を含まない記事も検索される場合がある。

手続きとしては，まず，「CD–ASAX」を用いて以下の語彙で記事見出しを検索した。「不妊」，「石女」，「子なし」，「生殖技術」，「体外受精」である。このうち，「石女」，「子なし」については検索語彙になかった。「生殖技術」は1990年代以降に，「体外受精」は1978年以降に検索語彙として設定されていた。「出産」での検索も行なったところ，「不妊」に関する記事見出しのすべてが体外受精をめぐるものだった。本稿の目的である「不妊」の言説の長期的な考察を満たす検索語は「不妊」のみであったこと，記事見出しの分類において記事内容も考慮されていることから，最終的に「不妊」の語による検索結果を分析対象とした。「体外受精」は不妊治療にとって重要と思われるので，補助データとして加えた。

「不妊」の語彙によって「CD–ASAX」から検索された「記事見出し」の件数は124件であった。次に，これらすべてについて「縮刷版」にあたり記事内容を確認した上で，動植物に関する記事およびヒトの避妊・不妊手術に関する記事を除外した。最終的に分析対象となった記事見出し数は，83件である。「体外受精」については，関連の記事見出しを検索した後，動植物に関する記事を除外するために見出しだけでは判断できないものについてのみ「縮刷版」にあたって確認した。また，必要に応じて「縮刷版」での記事内容

の確認を行った。

「CD-ASAX」によって検索できる記事見出しは1995年までのものであるが，生殖技術の発展に伴い「不妊」に関連する記事がこれ以降増加していることが予想される。近年の「不妊」の社会的意味を考察するにあたり，朝日新聞社がインターネット上で提供している「Digital News Archives for Library」（以下DNAと表記）を参考データとして加えた。「DNA」を用いて，1985年以降最新の記事を検索することができる。これには東京版だけでなく地方版の記事，また雑誌『アエラ』の記事も含まれる。「DNA」の場合は「CD-ASAX」と違って，語彙それ自体を検索し，「見出し」，「本文」，「見出しと本文」別にその語彙を含む記事を検索することが可能である。本稿では「見出しと本文」に「不妊」の語が含まれる記事を検索した。また，必要に応じて「縮刷版」にあたった。断りがない限り，分析結果は「CD-ASAX」に関するものである。

注意しておきたいのは，記事件数に関してである。近年になるほど「朝日新聞」の紙面自体が拡大しており，全体の記事件数が増加していることを考慮する必要がある[4]。近年社会問題化しているテーマを取り上げ，過去に遡って検索した場合，おのずと「増加している」という結果が得られることになる。件数の増減に大きな変動がない限り，単なる増加傾向だけでは「以前より高い関心が向けられるようになった」とは言えない。件数の変化とともに，語られ方の変化にも注目する必要があるだろう。

3.「不妊」の言説と社会的条件

戦後50年間の「不妊」に関連する記事見出しの検索結果から，まず全体的な流れを見ておきたい（表1）。対象となった記事見出しの全件数は，83件であった。これらの記事を，現在「不妊」が医療的な問題として扱われる傾向が強いという筆者の現状認識，および「生めない」問題がどの程度扱われてきたのかという筆者の関心から，「生殖医療」に関する記事と「生めない問題」に関する記事とに分けた。「生殖医療」には近代西洋医学だけでなく，漢方や民間医療も含まれる。分類の結果，「生殖医療」に関する記事が61件（うち5件は特集記事），「生めない問題」に関する記事が8件，「その他」が14件（うち4件は医療事故，5件は「不妊」関連出版物）であった。「生殖医療」に関する記事が全体の7割以上を占めるのに対して，「生めない問題」に関する記事は1割にも満たない。「朝日新聞」において「不妊」は，主として「医療的な問題」として語られているといえる。

次に，時代的な変化を見ると，50年代は1件，60年代は3件であったのが，70年代に入って14件と増え始め，80年代は26件，90年代には95年までで39件を数える。全件数の変化から言えば，70年代と90年代に急激な変化が見られる。すでに述べたように，件数の変化とともに語られ方の変化にも注目する必要がある。ここでは簡単に，上記の2つの記事分類別に見た件数の変化について触れておく。「生殖医療」に関する記事はどの年代も一貫して多数を占めるが，70年代と80年代には全件数の8割以上だったのが，90年代には6割台に下がる。代わって「その他」が増え，「生めない問題」も若干増える。

記事見出し件数の全体的な結果から，「不妊」の言説の特徴として挙げられるのは，第一に「不妊」が紙面に登場して以来，主として「医療的な問題」として語られてきていること，第二に90年代以降，医療とは別の文脈で「不妊」が語られ始めていることである。以下では，この2つの特徴に沿って，戦後50年の「不妊」関連記事を考察していく。

(1)「医療的な問題」としての不妊

戦後から70年代にかけて年間にせいぜい1，2件しかなかった「不妊」関連記事の中で注目されるのは，78年「試験管ベビー」の名で衝撃を与えた世界初の体外受精児誕生の記事である。**「元気に“世紀の赤ちゃん”」**の見出しが入った第一報（7月26日夕刊）は，10面と11面の見開き面のほぼ3分の2，二人の医師の写真入り，10段抜きの扱いである。この記事はそれ以前の「不妊」関連記事と比べて，かなり大きく報道されている。また，5年後の83年，日本初の体外受精卵着床の成功を伝える記事（3月14日夕刊）も，1面と15面においてともに写真入りで紙面の約半分を使って掲載されている。どちらも「不妊」が注目された記事であるが，記事の関心は「不妊」というよりは体外受精という「生殖技術」に向けられている。生殖技術への関心は，「体外受精」に関連する記事見出しが83年をピークにその前後の年を含めて集中的に取り扱われていることにも現れている[5]。

上記2つの記事に共通するのは，生めないものを生めるようにした不妊治療技術を評価する一方で，それがもたらす倫理的な問題を提示していることである。たとえば日本初体外受精卵着床の記事では，**「不妊症**

表1「CD-ASAX」「不妊」関連記事見出し

年代	記事見出し件数							記事見出し例 ［　］内は掲載年
	全体	生殖医療				生めない問題	その他	
		不妊治療一般	高度生殖技術	倫理問題	特集			
50年代	1						1	肺臓ガンと不妊増す［53］
60年代	3	2				1		不妊の弟の嫁［65］ 不妊にいどむ　ストレスの解消も大切［65］
70年代	14	7	2	3			2	不妊女性に人工輸卵管手術［70］ 子宮移植可能な段階　試験管ベビー［71］ 不妊と子宮内膜そうは［74］ せつない不妊の人　体外受精児誕生（英）［78］ いま不妊症対策は［78］
80年代	26	9	7	5	1（＋11）*	2	2	米で不妊の新解決法［80］ 顕微鏡で卵管手術　不妊治療に朗報［81］ （解説）不妊症には福音だが…［83］ 揺れる「生命」の定義　体外受精で妊娠検査［83］ 免疫不妊症，体外受精で子宝［85］ 〈連載〉（1）不妊夫婦，10組に1組も［85］
90年代（～95）	39	6	13	2	4	5	9	「男性不妊」の治療に成功　精子採り出し［90］ 急増する出生前診断［92］ 代理母の出産　不妊学会が否定的見解［92］ 「実の母」は中絶胎児!?（英）［94］ 「不妊の悩み克服」に共感や心の揺れ語る［94］ 〈連載〉不妊（1）～（4）［94］
件数	83	24	22	10	5（＋11）	8	14	
		61						

「不妊治療一般」：受精卵の操作を含まない生殖技術に関する記事
「高度生殖技術」：受精卵の操作が可能な生殖技術に関する記事
「倫理問題」：倫理問題に比較的多く触れている記事

*注9）を参照。

に悩む女性にとっては，大きな福音として迎え入れられよう。だが人間の誕生という生命の出発点に人工の手が加えられることへの疑念もなお強く，改めて，議論を呼びそうだ」と記されている。世界初体外受精児誕生の記事において示されたのと同じ懸念が，ここでも繰り返されている。78年と83年当時の「不妊」および「体外受精」関連記事から読み取れることが2点ある。一つは，不妊治療が体外受精によって象徴され，他方体外受精はその適用の場として不妊治療を必要とする，という両者の関連性である。もともと体外受精は畜産において品種改良を目的として開発された技術であり，同時に多くの可能性をはらんでいた。後に「クローン羊ドリー」が誕生したのが，その例である。しかしながら当時ヒトに関しては，体外受精が不妊治療の枠組みを踏み越えるものではなかったといえる。いま一つは，「不妊」を通して生殖技術によってもたらされる倫理問題が提示されていることである。当時の記事見出しには，「はたして医学の勝利か」，「賛否の声さまざま」（78年），「『人工の手』なお疑念」，「倫理に複雑な波紋」，「揺れる『生命』の定義」（83年）などが並ぶ。「体外受精」は，同時期に社会問題化した「脳死」[6]と対を成して，「生命の始まりと終わり」の定義を揺るがす高度医療技術として注目されている。

90年代に入ると，顕微授精や凍結受精卵など体外受精技術を発展させた不妊治療に加え，出生前診断，代理母，卵子の提供，余剰胚の譲渡，医療事故など，多岐にわたる問題が「不妊」を通して取り上げられようになる。これらの問題の多くは，受精卵の操作によって生じる問題群である。体外受精が登場した当初は生殖過程への人為的介入が問題にされたが，「むしろ重大な変化は，体外受精という技術の確立によって受精卵を直視下に操作することが可能になったことだ」（村岡，1998：170）。

ここで受精卵の操作が可能かどうかを基準にして，「生殖医療」に関する記事をさらに，「不妊治療一般」（受精卵の操作を含まない生殖技術）と「高度生殖技術」（受精卵の操作が可能な生殖技術）に分類した。また，倫理問題に比較的多く触れている記事についてはこれらとは別のカテゴリーとして設定した（表

1)。70年代と80年代は件数としては「不妊治療一般」の方が「高度生殖技術」より多い。ところが90年代になると逆転し，「不妊治療一般」が6件に対して「高度生殖技術」が13件となる。後者13件のうち5件が「非配偶者間体外受精」の問題である。

「CD-ASAX」および「DNA」で検索された「不妊」に関連する記事見出しを検討していると，医療的な問題としての不妊は，まず「不妊夫婦の治療」の問題としてあったといえる。ところがその限定的な問題は，生殖技術の発展とともに，卵子・余剰胚の提供，非配偶者間体外受精など「夫婦間」という枠組みを越えた問題に拡大し，さらに出生前診断，クローニングやES（万能）細胞の研究など不妊治療と直接的な関係を持たない問題へと展開している。生殖技術はその適用の場として，必ずしも「不妊治療」を必要としなくなっているのである。にもかかわらず，「不妊」関連の記事見出しを検索すると，不妊治療とは関係しない問題群の記事が上がってくる。つまり，「不妊」は「高度生殖技術」内部に取り込まれたまま，不妊治療の枠組を越えた問題と関連付けられているということである。

「朝日新聞」の戦後50年間の記事において，「不妊」は主として「医療的な問題」として提示されてきた。そこでの「不妊」は医学的に定義される「不妊症」のことであり，「治療」に関心が向けられ，「生めない問題」はほとんど取り上げられていない。さらに，「不妊」は体外受精に代表される高度生殖技術と結びつけて語られる。生殖もしくは生命への人為的介入を可能にする高度生殖技術が倫理問題をはらんでいる以上，そして「不妊」が生殖技術に取り込まれて語られる限り，「不妊」は倫理問題と関連付けられるのである。「朝日新聞」というマス・メディアにおいて，「不妊」に付与される意味の最も重要なものとして，「新しい生殖技術を社会に提示し，そこからもたらされる倫理問題を議論するために必要な“場”」を挙げることができるだろう。

(2)「当事者の問題」としての不妊

記事見出し件数の全体的な結果から得られた「不妊」に関する言説のもう一つの特徴は，90年代以降医療とは別の文脈で「不妊」が語られ始めていることである。90年代（95年まで）において医療関係以外の記事見出しが全体に占める割合は，4分の1である。その具体的内容は，不妊関連の出版物やテレビ番組の紹介，たとえばレナーテ・クライン編の『不妊』(91年)，お茶の水女子大学生命倫理研究会編の『不妊とゆれる女たち』(92年)，不妊治療の現状をフジテレビと『週刊文春』が提携してリポートしているのを伝える記事［後に松尾（1995）が本として出版］である。あるいは，**「『不妊の悩み克服』に共感や心の揺れ語る」(94年)，「不妊　各地で広がる語りあい　悩む人たちがグループ」(95年)**など心の悩みを取り上げた記事，養子を育てたい人のための講座を紹介する記事などである。これらの記事に共通して言えることは，「当事者の問題」を取り上げている点である。また，医療に関連する記事についても，不妊治療薬への異物混入や排卵誘発剤の副作用による死亡事故の記事（4件）など，当事者問題の視点を持つものであると言えるだろう。

「当事者の問題」が取り上げられるようになった理由として考えられることの一つに，新聞における編集方針の変更がある。90年代から新聞界全体に読者の意見を掲載するページが増え，読者とともに考える姿勢が打ち出されていく（後藤，1997：46–48）。しかしながら新聞以外に目を転じると，学術雑誌に掲載された記事・論文や国立国会図書館蔵書にも同様の傾向が見られるので[7]，編集方針だけの理由ではないと思われる。

主として「医療的な問題」として語られてきた「不妊」が，なぜ「当事者の問題」としても語られるようになったのか？　逆に，なぜそれまでは当事者の問題として語られなかったのか？　この観点から戦後の「不妊」に関連する記事を再度検討し，その中からマス・メディアにおける不妊の社会的意味のいくつかを照らし出したいと思う。記事見出しの件数および記事内容の変化を考慮して，3つの時期――(a) 戦後から世界初体外受精児誕生以前，(b) 世界初体外受精児誕生から80年代まで，(c) 90年代――に分けて考察する。

(a) 不可視化される不妊・母性を追求する不妊――戦後から世界初体外受精児誕生以前

「不妊」に関連する記事見出しは，50年代に1件，60年代では3件しかない。一方，「不妊手術」に関する記事見出しが60年代に3件あり，70年代の世界初体外受精児誕生以前で言えば，「不妊手術」の方が「不妊」よりも多い（「不妊手術」：10件，「不妊」：7件，両方を含む：1件）。戦後から高度経済成長期にかけて，所得の増加と産児制限によって豊かな生活が追求されていた時代背景の中で，**「子沢山，もうイヤ　増える中絶・不妊手術」(68年)**の見出しにあるよう

に，新聞の関心は「生み過ぎないこと」の方にあり，「生めないこと」は特別な意味を持たなかったと考えられる。

70年代に入って記事見出し件数が増加するが，それは体外受精児誕生に関する記事が登場したことによるだけでない。それ以前から「不妊治療一般」に関する記事見出しが見られる。たとえばオーストラリアでの**「不妊女性に人工輸卵管手術」（70年）**や，**「産婦人科医のメモ」**欄での**「不妊」（72年）**などである。当時の時代背景として挙げられるのは，まず出生率の変化である。戦後減りつづけてきた平均出生児数が「2.2」になり，それ以降横ばいを続ける。子ども数の分布で見ても，70年に入って「2人」（6割）と「3人」（2割弱）が大半を占めるようになる（72年「結婚と出産に関する全国調査」より）。「夫婦と子ども二人」という理想的な家族形態が実現すると同時に，この理想型は「平均的家族」となる。不妊手術の記事が70年代後半から減少し，**「お産革命」**の連載記事が78年に登場することに現れているように，新聞の関心は生み過ぎないことから生むことの再認識へと移行している。生むことへの関心の中で，不妊の逸脱性が浮上してくる。

この時代は「母性」が強調される時期でもある。当時の優生保護法改正運動を見ると，労働力政策や人口政策と並んで胎児の生命尊重の観点から改正要求が出され，他方反対派は命を産み育てる母親の立場からこれに異議を唱えている（上野，1990）。いずれの立場も子どもの命の大切さとそれを育てる母親の重要性を主張する。また田間（1999）は，同時期の子捨て・子殺しの社会問題化を通して，「母性喪失」という逸脱形態の背景に集合表象としての「母親」の成立を見る。生めない不妊女性は母性の欠落した人，それゆえ母性獲得のために努力する人と位置づけられ，新聞紙上では**「せつない不妊の人」（78年記事見出し）**と説明されるに留まる。

(b) 生殖医療と結びついた不妊——世界初体外受精児誕生から80年代まで

体外受精児の誕生によって生殖技術に関心が向けられるようになったが，すでに見たように，80年代は「不妊治療一般」に関する記事の方が件数としては多い。出産への関心の高まりと出産の医療化が進行する中で，不妊もまた医療化される[8]。女性にとっての「産む・産まない自由」とそれを可能にする生殖医療への関心は，体外受精児の誕生をきっかけに「不妊治療」にも向けられる。必要とされるのは専門家である医師の説明であり，そのことが不妊に関する初めての連載記事によくあらわれている。日本初体外受精児誕生の2年後の85年に，家庭面**「読むクリニック」**欄において，**「赤ちゃんが欲しい」**というタイトルで12回にわたって掲載された（表2）[9]。どの回も記者の質問に医師が答えるという形式で，12人の医師が排卵障害，着床障害，男性不妊，人工授精，体外受精，漢方療法，習慣流産など「不妊治療」全般について解説している。当事者の声はほとんど取り上げられていない。生殖医療に関する知識への要求において，専門家の説明が提示されるだけで，当事者の物語は必要とさ

表2　連載記事

タイトル		赤ちゃんが欲しい	いのち　生殖医療のいま
掲載年月		1985年8月～9月	1998年10月～12月
掲載面		家庭面：読むクリニック	第二社会面
記事見出し	掲載回 1	不妊夫婦，10組に一組も	自分の子望み絶たれ
	2	薬で治療しやすい排卵障害	「父」同じ子が結婚の不安
	3	卵管障害もあきらめないで	期待，落胆に疲れ果て
	4	着床は第3のハードル	患者の気持ち　先生分かって
	5	精子が子宮に入れない	ごめんね　母体心配涙の減胎
	6	原因の半分は男性の側に	希望の陰　副作用禍も
	7	二種類ある人工授精	不妊治療に費用の壁
	8	体外受精はこうして	心にのしかかる不妊
	9	漢方療法の効用と限界	「私の父はだれなの…」
	10	夫婦間の理解と協力を	不妊　苦悩と希望と250通超す手紙
	11	習慣流産を克服する	［養親と養子の会話：筆者注］
	12	読者の質問に答える	義姉に宿った夫の命
	13	――――	医者は何をすべきか
	14	――――	子ども　いなくても
	15	――――	「お子さんは？」の裏側で
	16	――――	体の劣等感消えた

れないのであろう。

しかしながら一方で，当事者の語りを可能にする状況が整えられていく。日本初の体外受精児誕生のわずか5年後に，**「体外受精で妊娠，東海大で100例　普及し方法も多様化」**，**「わたしは体外受精児なんだって　岩手県の希美ちゃん　国内初の公表」（87年）**の見出しが見られる。通常の（凍結受精卵や顕微授精でない）配偶者間体外受精に限って言えば，特異な秘すべき治療ではなくなりつつあることを示している。また，89年には**「『不妊女性への差別なくして』宮城・女性教師が手記」**，91年には**「『不妊』レナーテ・クライン編」**の出版が取り上げられている。体外受精が普及し，実名公表されたことによって不妊治療に対するタブー感は薄らぎ，実際に当事者の物語が登場したことによって，当事者の語りが拡大する可能性が切り開かれる。しかし逆に，体外受精が特異性を喪失すれば，新聞の関心は薄らいでいくとも考えられる。90年代以降，新聞はなぜ当事者の問題を取り上げるようになったのだろうか。

(c) 多様化する不妊——90年代

90年代に入ると，生殖技術と結びついた「不妊」の問題が「不妊夫婦」の枠組みを越え，さらに「不妊治療」の枠組みをも越えて拡大していることをすでに指摘した。それは生殖技術の問題が「不妊夫婦の治療」という限定的な領域の問題から，より広範な「社会の問題」になったと言いかえることもできる。たとえば，ある医師が日本では認められていない非配偶者間体外受精の実施を公表したことが注目された。第一報（98年6月6日）が夕刊，総合1面で報じられた後，3ヶ月間に関連記事が10件掲載された（「DNA」検索による）。技術的には同じでありながら，適用の対象枠がこれまでは配偶者間に限定されてきたことで「不妊夫婦の問題」として受け止められていたのが，配偶者以外に拡大されたことによって家族の定義を揺るがす「社会の問題」となったのである。公表の4ヶ月後に始まった連載**「いのち　生殖医療のいま」**では，夫婦以外の精子や卵子を用いた出産，多胎妊娠による減数手術など，生殖医療に関わる体験が募集された。16回にわたる記事の内容のほとんどが，当事者によって語られた体験で構成されている（表2参照）。生殖技術と結びついた不妊の問題が「不妊夫婦」の問題から乖離したことによって，逆に当事者の声が拾われるようになっている。

また，90年代という時代背景を考えると，少子化，児童虐待，未婚者の増加，夫婦別姓，離婚の増加など，子ども観や家族観の揺らぎが顕在化した時期だといえよう。少子化議論において子どもを生むこと・持つことの意味が問われ，児童虐待問題において子どもを育てることの意味が問われる。これまで自明視されてきた事柄が自明性を失い，それらの再構築が要請される社会状況において，「不妊」を媒介にして新しい意味が見出されようとしているのではないだろうか。**「二人のままでも，十分に幸せ。でも，子どもがいたらもっと楽しいはず」**（連載「家族模様」第3回，99年），**「子どもを産むことがゴールではなく，子どもを迎えて家族として生きていることの方が大切だと思います」**（連載「いのち　生殖医療のいま」98年），**「子供を産み育てるだけが女の人生ではない」**（「ひととき欄」99年）といった不妊女性の声が紹介される。それらの声は，子どもを持つことを迷っている者，親子関係に悩んでいる者，子育て後の人生を模索している者に，子どもとは何か，家族とは何か，を映し出す「鏡」となる。**「夫婦にとって子どもって何だ。子どもがいないからこそ，話し合えたのだ」**（連載「いのち生殖医療のいま」98年）と語る当事者のことばから，子どもと家族の新しい意味を引き出そうとしているように思われる。

4. まとめと議論

「朝日新聞」というマス・メディアにおいて，「不妊」は主として生殖医療と関連付けて扱われてきた。そのことは体外受精児誕生当初はもとより，現在においても基本的には変わっていない。したがって「不妊」関連の記事中のほとんどで，「治療」とセットになった「不妊治療」の語彙が使用されている。新聞において「不妊」が生殖医療と結びつけて語られることによって，それは医学的に定義される問題として位置付けされる。しかもそこでの「不妊」は，新しい生殖技術を社会に提示し，そこからもたらされる倫理問題を議論するために必要な「場」としての意味を持つ。

90年代以降に当事者の問題が取り上げられるようになったのは，もちろんそれまでの「不妊」の問題の扱いに対する反省からではない。高度生殖医療が不妊夫婦だけの「特殊な問題」ではなく，より広範な人びとに関わる「社会的な問題」となったためである。また，近代家族の安定期では生殖技術は，近代家族を擁護し保持する方向で使われるが（横山・難波，1992：243），家族の多様化や家族解体が叫ばれるようになる中で，技術的に近代家族の解体を可能にする生殖技術

とその当事者の声に関心が向けられたことも背景にある。当事者の問題としての「不妊」は，医療的な問題としての不妊が子どもや家族をめぐる社会問題と交叉する場に出現していると言える。マス・メディアの中で不妊の当事者は，新しい生殖医療のあり方，新しい家族のあり方を映し出す「鏡」としての役割を担わされるという，新しい局面に置かれていると言えるだのではないだろうか。

こうしたマス・メディアにおける「不妊」の社会的意味は，社会における「不妊イメージ」の形成にとって重要であるだけでなく，社会の一員である当事者の不妊に対する認識においても重要である。本稿の分析から言えることは，第一に，マス・メディアにおける不妊のイメージは当事者に対して，「不妊」を医療的な問題として認識することを支え，社会的な要因から生じる問題として理解するよりも「治療」という医学的対処によって解決する方向へと推し進める。もう一点は，子どもと家族の意味の再構築にとって必要とされた当事者の語りは，まさに同じ当事者であるゆえに受け手の当事者にとって重要となる。諸田も雑誌記事の言説分析において，つらい不妊治療の結果子どもを得たストーリーから，子宝を得なくても不妊という経験を価値づけ，自己を回復する「克服ストーリー」に移行していると指摘している（諸田，2000）。こうした克服ストーリーは当事者に励ましを与えると同時に，それを目指して努力すること，つまり単に医学的に不妊を克服するのではなく，不妊という状態から新しい生き方を見つけ出すことへの強制力ともなる。子どもができないことに悩みつづける当事者は，その感情の表出を抑圧される可能性がある。

しかしながら，マス・メディアにおいて語られる「不妊」の言説は，いうまでもなくマス・メディアにとっての言説である。鄭が「マイノリティが『鏡』とされるかぎり，マジョリティはそこに『自画像』を見ることに夢中で，決してマイノリティ自身を見ようとしない」（鄭 1996：22）と指摘しているように，マス・メディアは当事者の語りの中から彼らの聞きたい部分を選び出しているのである。したがって，マス・メディアにおける「不妊」の言説と当事者が経験する「不妊」との間にズレが生じる。たとえば，当事者の語りを中心に構成された98年の連載**「いのち　生殖医療のいま」**に対して，一読者である当事者が次の投稿を寄せている。**「生殖医療そのものより，心のもち方について悩み，苦しみました。（中略）このコーナーで，何かを見つけたいと読んでいます。でも，まだ心にズキンとくるようなものはありません」**。

自己イメージが他者による自己への評価を通して形成されるという点で，当事者がマス・メディアによってつくられる「不妊イメージ」に拘束される部分はあるだろう。しかし，上記の当事者のようにズレているという認識とそれを主張することが，他者の「不妊」に対するイメージを修正し，翻って自己イメージを変更していくことにつながる。当事者が自らの経験を感じたままに語ることば，たとえばマス・メディアでは聞かれない「治療はつらくない」とか「一番やりたいことは，やっぱりお母さんになること」[10]といった声をも含めて，丹念に拾い上げていく作業が必要であると思われる。

注

1）「不妊」の問題は多くの場合女性について語られるが，「男性不妊」という男性側の問題があること，そもそも「不妊」はカップルの間に生じる問題であることから，「産めない」ではなく「生めない」という表現にした。

2）言説分析に関しては，シンボリック相互作用論の立場からセクシュアル・ストーリーの分析を行った Plummer（1995）を参考にした。

3）データベースでの検索が可能なのは，日経新聞が1975年以降（ただし全文は1981年10月以降），毎日新聞が1987年以降，読売新聞が1986年9月以降，産経新聞が1992年以降である。

4）紙面数だけを見ても，64年：16面，70年：24面，80年：24面，90年：32面，99年：40面，と増加している。

5）「CD-ASAX」で「体外受精」を検索すると，78年に初めてヒトの体外受精に関する記事が5件登場する。翌年は13件と増えるが，80年，81年は件数が減り，83年に激増する。前後の年を合わせた3年間で161件を数え，他の時期に比べて格段に大きく扱われている。その後95年までの11年間で最も件数が多かった年でも24件であることから，日本初体外受精児誕生がいかに注目を浴びたかがうかがえる。

6）「CD-ASAX」で「脳死」を検索すると，68年に初めて登場する。60年代，70年代は共に10件に満たないが，80年代に入って289件と急増し，90年代は前半だけで458件を数える。

7）1985年以降の国内の学術雑誌に掲載された記事・論文が検索できる「雑誌記事索引（CD-ROM）」で「不妊」を検索すると，80年代はすべてが医学専門論文（ほとんどが『日本不妊学会雑誌』掲載論文）だったのが，92年に倉重の「不妊と人工生殖に関する社会学的考察」，柘植，長沖の「特集『不妊』」に寄せた論文があらわれたのを皮切りに徐々に増え始め，98年には35件中10件が医学領域以外の論文であった。

1969年以降の国内で発行された図書目録である「国

立国会図書館蔵書目録（CD-ROM）」での検索においても，70年代はすべてが医学専門文献だったのが，80年代には当事者向けの医学的解説書が現れ，90年代に入って女性問題や生命倫理の視点から書かれた文献が登場する。

8）倉重（1992）は，不妊の医療化が生殖と病気の医療化の中で必然的に起こったことを考察している。

9）記事見出しの第一次検索過程では，特集記事の1回目だけが検索され，残りの11回は検索されなかった。「縮刷版」にあたった時点でそれらの存在を確認できたが，記事見出し件数には加えていない。

10）筆者が代表をつとめる自助グループ内での当事者の発言から。

引用文献

鄭　暎恵，1996，「アイデンティティを超えて」，『岩波講座現代社会学15　差別と共生の社会学』，岩波書店，1–33.

後藤文康，1997，「新聞」，岡　満男・山口功二・渡辺武達編『メディア学の現在』，世界思想社，45–61.

Klein, R., D., ed., 1989, *Infertility: Women Speak Out About Their Experiences of Reproductive Medicine*, Pergamon Press.（フィンレージの会訳，1991，『不妊――いま何が行われているのか』，晶文社.）

倉重加代，1992，「不妊と人工生殖に関する社会学的考察」，『山口大学文学会誌』43，山口大学文学会，51–68.

松尾紀子，1995，『赤ちゃんがほしい――不妊症治療の最前線で何がおこっているか』，文藝春秋.

宮　淑子，1992，『不妊と向き合う――生殖技術・わたしの選択』，教育史料出版会.

諸田裕子，2000，「『不妊問題』の社会的構成」日本家族社会学会編『家族社会学研究』12(1)，69–80.

村岡　潔，1998，「不妊治療」，佐藤純一・黒田浩一郎編『医療神話の社会学』，世界思想社，158–184.

長沖暁子，1992，「不妊の女性たちが語りはじめた」，『日本婦人問題懇話会会報』52，日本婦人問題懇話会，72–79.

お茶の水女子大学生命倫理研究会編，『不妊とゆれる女たち――生殖技術の現在と女性の生殖権』，学陽書房.

大日向雅美，1992，『母性は女の勲章ですか？』，扶桑社.

Plummer, K., 1995, *Telling Sexual Stories: Power, Change and Social Worlds*, Routledge.（桜井　厚・好井裕明・小林多寿子訳，1997，『セクシュアル・ストーリーの時代――語りのポリティクス』，新曜社.）

田間泰子，1995，「不妊と家族の近代化」，『熊本大学文学部論叢』48，熊本大学文学会，1–24.

――――，1999，「逸脱する母親たち」，『講座社会学10　逸脱』，東京大学出版会，35–84.

柘植あづみ，1992，「生殖技術の発達と選択」，『日本婦人問題懇話会会報』52，日本婦人問題懇話会，80–88.

――――，1999，『文化としての生殖技術――不妊治療にたずさわる医師の語り』，松籟社.

上野輝将，1990，「出産をめぐる意識変化と女性の権利」，女性史総合研究会編『日本女性生活史5　現代』，東京大学出版会，101–131.

山本祥子，1997，「更年期の構築――医療が描く女性像」，日本女性学研究会編『女性学年報』18，78–87.

横山美栄子・難波貴美子，1992，「現代日本の家族と生殖技術」，お茶の水女子大学生命倫理研究会編『不妊とゆれる女たち――生殖技術の現在と女性の生殖権』，学陽書房，225–247.